

作文作成支援ツール

筑波大学／リュブリャナ大学
アンドレイ・ベケツシュ

1 作文一言いたいことと言えることの間のギャップとの戦い

外国語学習も母語習得と同じように、学習言語の範囲内で足場を作り、それを次第に拡大していくようにしなければ、良い成果が期待できない。

なぜなら、母語及びその他の学習媒介言語に依存しすぎると、その言語と学習言語との間に様々な干渉が起こりうるからである。

表現力の側面を担う作文教育は語学学習において重要な位置を占めている。学習者にとって、作文は、自分の表現の力と自分の表現したいこととの間のギャップをどう埋めるかという、フラストレーションのたまる戦いである。そのギャップを埋めるために、学習者は主として二つの戦略に頼る。

- a) 習得した表現手段を習得していない範囲へ応用拡大する。
- b) モノリンガルまたはバイリンガル辞典に頼る。

このような戦略には次の問題点がある。a)では未知の応用範囲に踏み切るために、母語など、習得済みの言語の表現習慣に頼らざるを得ない。b)でも、問題は基本的にa)の場合と同じである。現状として、各レベルの学習者が頼れるような日本語学習辞典が未だにないから、既存の辞書類では未習の表現手段をどのように使用したらいいかという的確な情報が得られないからである。

2 応急手当としてのオンライン教材

LDOCE、COBUILDなどのようなモノリンガル英語学習辞典と似た機能及び範囲の幅を持つ日本語学習辞典の作成も急務である。しかし、現在のパソコンの普及を考えれば、学習者のパッシブな理解能力を生かしながら、アクティブな表現能力を向上させる教材開発が可能になった。一つの理想として考えられるのはオンライン統合教材、すなわち教科書と、充実した辞書とのパソコンの上での統合である。このような教材を開発し、その実現に至るまでかなりの労力を費やす必要がある。

オンライン教材の構想を明らかにし、本格的なプロジェクトに踏み切る前の実践を積み重ねるため、ここでは、応急手当として、ほぼ既製品から組み立てられる簡易オンライン教材を提唱する。

2.1 簡易オンライン教材の構成

本研究で用いた教材は国際交流基金から貸された『日本語初歩Ⅰ』である。学習者の理解能力と表現能力を支援するために、学習者にすでに学んだ範囲の表現手段、及びその使用例を、すぐ手が届くような形で提供しなければならない。ここでは、教科書を丸ごとテキストファイル形式で、コンピュータに移すという、最も簡単な方法を用いた。テキストファイル形式の教

科書を強力な検索ソフトと一緒に用いることで、上記の目標が実現できる。

実際に用いたのは、マッキントッシュのパワーブック145Bと、PDSのエディソフトのEdit7である。このエディタは大変優れたもので、強力な検索機能を備え、正規表現による一括のGREP検索ができる。正規表現では、活用語、活用形を曖昧にしたまま、あるいは、綴りに自信がなくても、曖昧検索が可能である。さらに、検索結果をすぐ別のウインドーで参照でき、必要に応じては、本文参照もできる。

なお、Windowsでも、PDSの秀丸エディタを使用すれば、同等の機能ができる。

2.2 簡易オンライン教材でできること

A GREP検索機能を用いて、語彙項目の用法の実例が検索できる。レッスンごとに別のファイルを作ること、どの使用例がどのレッスンに登場するかという重要な情報も簡単に得られる。ここでは、レッスンの範囲を第1課から第21課までの間に設定し、その範囲内の「あそび」の使用例を検索する。「あそぶ」、「あそび・ます」、「あそば・ない」などの形で出てくるので、「あそ [ん／ばーぼ]」の形で検索しなければならない。

図1 「あそ [ん／ばーぼ]」の検索結果

```
-----  
:1-21.1534:      あそびに 行きます。  
:1-21.1554:      1. わたしは 友だちの ところへ あそびに 行きます。  
:1-21.1590:      2. わたしは 友だちの ところへ あそびに 行きます。  
:1-21.1607:      3. わたしは 友だちの ところで あそびます。  
:1-21.1616:      2. わたしは 一人で あそびます。  
:1-21.1725:      友だちと あそびます。 → 友だちと あそぶ。  
:1-21.1725:      友だちと あそびます。 → 友だちと あそぶ。  
:1-21.1924:      友だちと あそびます。 → あそぶ → あそんで → あそんだ  
:1-21.1924:      友だちと あそびます。 → あそぶ → あそんで → あそんだ  
:1-21.1924:      友だちと あそびます。 → あそぶ → あそんで → あそんだ  
:1-21.1924:      友だちと あそびます。 → あそぶ → あそんで → あそんだ  
:1-21.1988:      4. バドミントンを します、そして、 あそびます。  
:1-21.2522:      8. わたしは あそびます。  
-----
```

検索行「1924:」などが何回が繰り返されて表示されている例がある。これは曖昧検索の結果、同じ行にいくつもの「遊ぶ」という表現の形式が現れる練習の使用例が、異なった形式ごとに、使用例として表示されるからである。重視表示が不要の場合、一行の表示を「一回だけ」に設定することもできる。

また、本文と練習を切り放すことで、オンライン化された教科書の必要な部分だけを検索するように工夫もできる。

B 次に、本文の参照に関しては、更に、検索した使用例がどのような文脈に現れているかという、重要な情報も簡単に参照できる。検索結果ウインドーで、参照したい使用例の行に「虫眼鏡」マークを合わせて、クリックすると、本文の該当の個所に移る。以下の図2では、検索行「1607:」に現れる例を本文の文脈で参照した結果が示されている。

図 2 使用例の本文の文脈での参照

1. れい

わたしは 日本で ぎじゅつを ならいます。
→わたしは 日本へ ぎじゅつを ならいに 行きます。

1. わたしは くすりやで くすりを かいます。
2. わたしは としょかんで 本を よみます。
- <<<3. わたしは 友だちの ところで あそびます。>>>
4. わたしは だいどころで 水を のみます。
5. わたしは 会社で しごとを します。

練習の箇所が表示され、「何々しに行く」という文型の中の「遊びに行く」が出てくる。このような作業を通じて、学習者は自分のパッシブな知識として持っている情報を、作文を作成するためのよりの確かな表現に応用できる。

C 最後に、母語や媒介言語等からの語彙項目検索について述べる。教科書のレッスンの本文、練習の他に、語彙リストあるいは単純な対応表を検索対象に追加することで、教科書の範囲内の媒介言語から語彙へのアクセスも可能になる。検索された語彙項目の使用例は上記のように参照すればよい。

なお、フリーウェアのMacJDic (DOS/V版もある)を用いれば、仮名表記から漢字表記を確認することも可能である。あるいは、媒介言語が英語の場合、語彙項目にアクセスするためにも用いられる。さらに、中級以上では、漢字表記の使用がふえるので、読めない漢字表記を読むためにも、MacJDicは強力なツールである。

3 まとめ

本稿ではパッシブな理解能力を活性化し、アクティブな表現能力に応用するための簡単な支援ツールとして、簡易オンライン教材の構想、実現を紹介した。学習者のパッシブな受け手の役割を促す、おおよそのCAIに比べて、安くて、簡単で、本来の教科書からもさほどかけ離れていない、馴染みやすい側面が多い。

現段階では試作にすぎないので、学習者に実際にどれほど受けられるかという疑問も残っている。特に、学習者の便宜を測っていない規制のエディタ・検索ソフトを用いているので、使用上の問題が生じる可能性がある。しかし、パソコンに少し慣れている、中級レベルの利用者なら、使用上の問題はおそらくそれほど大きくないであろう。

今後の課題としては、「電子メール教室」などで、その有効性を調べながら、内容面、使用面の質の向上をはかることである。